

地球環境問題—地球温暖化を中心に

第13-14回 地球温暖化（その4 京都議定書）

山口 光 恒

Video 京都会議の様相

1、京都議定書の内容 <http://unfccc.int/resource/docs/convkp/kpeng.pdf>

1) 対象物質

CO₂、メタン、亜酸化窒素+代替フロン類3種（後者の基準年は1995年）

米国の代替フロンの排出は95年がピーク、日本 95年以降も使用量が増加、

2) 削減率 議定書3条1項

先進国平均 5.2%（2008年～2012年の年平均、1990年対比）

削減率の差異化 ロシア0%、日本6%、米国7%、EU8%など

3) 排出権取引（議定書17条）、共同実施（議定書3条1項、6条）

先進国間のみ 共同実施はプロジェクトベース

4) 吸収能力勘案 議定書3条3項、4項

5) Clean Development Mechanism 議定書12条

先進国/途上国間 プロジェクトベース

6) 発効要件（議定書24条1項）と時期

7) 約束不履行 18条

8) 合意に至らなかった点

途上国の義務追加（任意であっても）

共通政策手段・措置

9) 追って詰めるべき点

法的拘束力（不履行の場合の措置）、排出権取引など京都メカニズム、

吸収源の計算方法、途上国支援

2、京都議定書の評価 実現可能性(Feasibility)、効率性(Efficiency) 及び衡平性(Equity) の観点から

1) 短期の絶対値目標と京都メカニズムの組み合わせ

コストを含めた不確実性

2) 初期配分と衡平性

差異化 炭素1トン削減コスト 米153ドル、欧州198ドル、日本234ドル (資料1)

(衡平性とは何か GDP当たり、一人当たり、一律削減等)

国際競争力と日本の交渉力

3) 排出権取引 (効率性)

限界排出削減費用の差 (資料1)

4) ホットエアーの存在 (Clintonの戦略)

5) 発生地主義 産業の海外移転誘発のリスク

6) 途上国問題

自主的参加、evolution

米国議会の批准問題 (既述)

7) 適応なし (適応は得点にならず)

3、京都議定書の論点

京都メカニズム、シンク、不遵守の措置、ホットエアー

3-1、京都メカニズムの論点

● 排出権取引の論点

1) 補完性 Supplementality と EU バブル

議定書の文言 (17条)

The Conference of the Parties shall define the relevant principles, modalities, rules and guidelines, in particular for verification, reporting and accountability for emissions trading. The Parties included in Annex B may participate in emissions trading for the purposes of fulfilling their commitments under Article 3. Any such trading shall be supplemental to domestic actions for the purpose of meeting quantified emission limitation and reduction commitments under that Article.

最終結果(Marrakesh Accords)

Each Party included in Annex I shall maintain -- a commitment period reserve which should not drop below 90% of the Party's assigned amount -- or 100% of five times its most recently reviewed inventory, whichever is lowest. Decision 18/CP.7 Annex 6

EUのBurden Sharing (EU bubble) (資料2)

2) マーケットパワー

ロシア・ウクライナ等の売り惜しみ、日・米・EUの買い控えによる非効率

ホットエアー：移行経済国2010年1.5億トン、同年のOECD諸国のBAU排出量は京都議定

書上の割当量よりも10億トン増加見込み (Victor)、売り手支配の可能性

効率的な市場の創設

プレイヤーの数、取引所取引 (このためにもプレイヤーの数が必要)、売り手責任

3) 責任論議

売り手責任と買い手責任 (参考文献8 山口光恒ホームページに掲載)

内容、長所・短所 (費用効果・環境効果)

売り手責任の下での工夫

共同責任 (EU)、交通信号方式 (参考文献2)

● CDMの論点 (参考文献9)

1) 削減の追加性 12条5.C

Reductions in emissions that are additional to any that would occur in the absence of the certified project activity. なかりせば排出量BAU

a) 商業プロジェクトに対する考え方

商業プロジェクトの見分け方 長期・短期の利益、利益率等

投資判断は政治的安定性、文化的つながりなど別の要素もある

b) ODA案件の扱い 主要論点の一つ

CDMについては資金の追加性の規定無し

結論 Marrakesh Accords

Public funding for CDM “is not to result in the diversion of official development assistance –“ Decision 17/CP.7
--

2) ベースライン排出量 取引費用と正確性・単純性

BAUより少ないと、投資国からみて魅力無し

〃 より多いと、全体の排出量増加、CDM本来の目的からはずれる

投資国、ホスト国共にBAUよりも大きく見せようとする誘惑がある。その為に審査は厳しい。

但し、あまりに複雑では取引費用が嵩みプロジェクトが減る。このバランス、

日本政府案 包括的ベースライン

3-2、シンクを巡って

3条3項 afforestation, reforestation and deforestation since 1990

3条4項 how and which --- activities related to --- removals by sinks in the agricultural soils and the land-use change and forestry categories shall be subtracted from the assigned amount ---

につきCOP/MOP会議で決める。基本的には第2約束期間→第1約束期間も可能
要は決まっていなかった。

日本は森林保全も含めた全ての活動が対象となるとの前提で3.7%とした。

決定 3.9% Marrakesh Accords Decision 11/CP.7 Appendix

3-3、不遵守の措置

議定書18条 未定、しかし時期割り当てから1.3倍を差し引く 参考文献14

3-4、途上国の参加

途上国の参加とホットエアー 紙幣の印刷とインフレ

COP4におけるカザフスタンとアルゼンチンの自主的参加と排出権取引参加要求

4、京都議定書から何を学ぶか **Lessons from Kyoto**

参考文献

- Baron, R., 1999a: "Market Power and Market Access in International GHG Emissions Trading" IEA Information Paper, International Energy Agency
- Burniaux, J. M., 1999: "How important is market power in achieving Kyoto? an assessment based on the GREEN model". OECD paper. Economics Directorate
- Baron, R., 1999b: "An Assessment of Liability Rules for International GHG Emissions Trading", IEA Information Paper, International Energy Agency
- Ellis, J., and Bosi, M., 1999: "Options for project emission baselines", OECD and IEA Information Paper,
- EU 1999: "Preparing for implementation of the Kyoto Protocol", Commission Communication to the Council and the Parliament, COM (1999) 230
- Victor, D.G. 2001, "The collapse of the Kyoto Protocol and the Struggle to Slow Global Warming", Princeton University Press
- 山口光恒 2002, 「温暖化対策としてのクリーン開発メカニズムを巡る国際情勢と日本の対応」三田学会雑誌95巻2号 2002年7月 慶應義塾経済学会
- 山口光恒 2000: 「京都メカニズムの論点」、環境保全と成長の両立を考える研究委員会報告書 第2章所収論文 地球産業文化研究所
- 山口光恒 1998 「排出権取引、売り手責任で」日本経済新聞 1998年10月1日
- 高村ゆかり・亀山康子編「京都議定書の国際制度」信山社 2002年2月
- 澤 昭裕・関総一郎編著「地球温暖化問題の再検証」東洋経済新報社 2004年2月
- 地球産業文化研究所 2006「CDM/JI への事業者の取組みの促進に関する調査研究 報告書」
- 村瀬信也「気候変動の将来枠組み」国際問題2006年6月号 日本国際問題研究所

京都議定書目標達成のための日・米・欧限界削減費用比較 (資料1)

単位 1990年ドル/CO₂1トンあたり

	主要モデルの中央値	
	国内対策のみ	国際排出権取引実施
日本	90	19
米国	49	
欧州	57	

出典 IPCC 第3次報告書を基に作成

EUの国別削減目標 (資料2)

	当初案	98年6月案
ポルトガル	40%	27%
ギリシャ	30%	25%
スペイン	17%	15%
アイルランド	15%	13%
スウェーデン	5%	4%
フランス	0%	0%
フィンランド	0%	0%
イタリア	-7%	-6.5%
英国	-10%	-12.5%
ベルギー	-10%	-7.5%
オランダ	-10%	-6%
ドイツ	-25%	-21%
デンマーク	-25%	-21%
オーストリア	-25%	-13%
ルクセンブルク	-3%	-28%
加重平均	-15%	-8.0%

Communiqué: 2106. Council - ENVIRONMENT, 16-17/06/98 (en)より作成